

事例

「一緒につくって一緒に食べる」子供に向けた、さりげない支援の形

てい一だこども食堂運営委員会

てい一だこども食堂（沖縄県浦添市）では、給食以外にご飯を食べられない子供や孤食になりがちな子供に、自尊心を傷つけることのない、さりげない支援の必要性を認識したことから、こども食堂の運営を始めるに至りました。自己肯定感を高め、共に未来を築いていく居場所を考える上で、学校以外に子供が警戒することなく出入りでき、設備があり、すぐに活動を始められる場所が、浦添市においては児童センターや、地域の自治会であったため、そこを拠点に活動しています。

活動における一番の特徴は、地域の大人と子供が一緒になって食事をつくるという点です。献立は、ごはん、味噌汁、常備菜を基本にしており、毎回、食堂に来る子供は食材や栄養のこと、調理の段取りを学ぶことができます。時には、地元料理の沖縄そばや、ナン・ピザを粉から手づくりすることもあり、手でこねる作業が楽しいと人気を集めています。これらの調理体験は食に関する知識や経験だけでなく、チームワークや協調性など、子供たちのコミュニケーション能力を高めることも狙いの一つとしています。

さらに月に一度、季節に根差したイベントも開催しています。夏は流しソーメンやカレーパーティー、秋は親子でのバーベキューやシークワサー狩り、冬はクリスマス料理やおせち料理への挑戦など、子供たちの心に残る思い出づくりに力を注いでいます。

運営は当初、小学校のPTA会員や民生委員、てだこ市民大学の学生、地域住民及び大学生から成る、見守りボランティアの21名から始まりました。活動を始めてまもなく報道に取り上げられたことをきっかけに、地域の6自治会の協力、近隣地域の個人的な協力が得られるようになりました。

食材については、地域住民からの寄付や寄贈、さらに食品メーカー3社からの提供支援により、現在は備蓄できるまでの状況になっています。

活動を通じた子供達の反応は“お母さんが体調不良の時にご飯を作ってあげると喜んでくれていたのが嬉しかった”、また地域の大人たちも、“自分の子や孫が通っている学校にもそういう子がいるんだ”と身近な問題として感じるようになり、“自分にもできることを…”と地域の協力者が増えてきています。

今後は、この活動がどの校区内でも地域と連携してできるものとし、沖縄県内各地に広がりつつあるこども食堂との情報共有や連携を深めていく予定です。



地域住民からいただいた野菜を使い、みんなで作った料理をみんなで食べる風景。



地元の料理である沖縄そばを手作り。こねる作業は子供たちから楽しいと評判。